
ほのぼの(?)幻想郷～変態達の宴～

えふちー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ほのぼの(?) 幻想郷へ変態達の宴へ

【Nコード】

N2077K

【作者名】

えふちー

【あらすじ】

あいつも変態、こいつも変態。えっ？まさかあの人まで！？
仕方ありません、作者が変態なのですから…
変態作者が暇をもてあましている方にお送りする、幻想郷変態物語。

第一話「変態は死んでも治らない」(前書き)

!CAUTION!

この作品にはかなりの変態&お馬鹿成分が含まれます。まともな奴はほとんどいません。それでも良いと言う方はw k t k しつつ本文へお進み下さい…

第一話「変態は死んでも治らない」

く早朝 博麗神社く

う…寒い。

妙にまぶしくて目を覚ました。どうやら外には雪が積もっているらしい。

正直まだ布団から出たくないけど…

「…もう朝なのね…ふああ」

思わず欠伸が漏れてしまった。

「うー…起きないと…ん？」

あれ？なんだか妙に左半身が温かいような…

とりあえず確認。左腕を動かしてみると、ふにっとしたものに触れ…ん？ふに？

「んう…おはようれいむー」

長い金髪をボサボサにした、小さな少女と目が合った。

眠そうな表情が可愛い。

「…おはよう、魔理沙」

そういえば、昨日は宴会の後ふらふらで帰れそうに無かったからこいつを泊めたんだった。危ない危ない、一瞬蹴り出しそうになった。

「れいむ、おなかすいたぜー」こいつは朝食までたかる気なのか。

はあ…ウチに二人分の朝食なんてあったかな…

ほのぼの幻想郷

く二色と七色く

「あ、この味噌汁うまいぜ」

「そりゃどうも」

「ここにこと元気に朝食を摂る魔理沙。元気があってよろしい。」

「ところで魔理沙」

「ん？なんだ霊夢？」

「なんで私の布団で寝てたのよ？別の布団は用意してあったでしょうに」

まあ、大方予想はついていたりする。

「う？えーと…それは…」

予想はついているので、ちよつと構ってみる。

「もしかして…寂しかったとか？」

「なっ…そそそんなことは無いんだぜ！？」ガタツと立ち上がって必死に否定する魔理沙。赤い顔がとつても可愛いわ…

「あら、じゃあどうして私の布団に？」

ニヤニヤを抑えているけど、抑えきれているかが心配だ。

「えっ、えーと…それは…そ、そう！寝相！私は寝相が悪いんだぜ！！！」

逃げ切れたと言わんばかりに叫ぶ魔理沙。でも…

「アンタに用意してあった布団は綺麗なままだったわよ？」

「うぐっ…だつて…」

あ、だんだん涙目になってきた。そろそろ止めようかしら？

「はいはい、分かっているわよ…寒かっただけな（ガラッ！）」「ちよおおおーつと霊夢うううー！！」「きゃあああー！？」

ビックリして思わず持っていた茶碗を落としてスカートに熱々の味噌汁をぶちまけてしまった。

「熱っ！あちちっ！このっ…アリス！どうしてくれんよ私の味噌汁！！！」

振り返ればそこには変態アリスがいた。この変態人形使いめが！

「れ、霊夢大丈夫か！？今拭いてやるから！」

「あ…ありがとう魔理沙…」

まだ若干涙目で言う魔理沙。 ああ…この子は普段からこのくらい優しければいいのに。

「え？スカートにこぼれた味噌汁を…拭く…？魔理沙が？霊夢の…？足を…舐める…！？駄目よ魔理沙！舐めるなら私を舐めて！むしろ舐めさせてえええ！！」

「アンタは少し黙ってなさい！！」

朝からなんなのコイツは。早く帰ってくれないかしら。魔理沙が怯えているじゃない。

〈少女後処理中〉

「で？なんでアンタはこんな朝早くから来てんのよ…」おかげで洗濯物が増えてしまった。冬の洗濯は辛いのに！

「だってー、魔理沙の家に不法侵入しても魔理沙がいなかったから、ここかなあと思って」

「コイツ今さらつとんでもないこと言ってたわよ？」

「か、鍵を二重にする必要があるな…」

「まあそんなことはどうでもいいのよ…それより」

良いのか？人として…いや妖怪だったかしら？

「なあんで魔理沙が霊夢と寝てんのよお！？」

あまりのうるささに魔理沙が驚いてびくつと跳ねる。

「大声出すんじゃないわようつさいわね」

「聞きなさいよ霊夢う！なんで魔理沙がアンタと寝て…ん？寝る…？はっ！まさかっ…れえええいむううううう！！！！」

コイツは変なクスリでもやってるんじゃないかなかるうか。

「あんまりうるさいと退治するわよ」

「退治！？やるって言うの？…いえ、やって！むしろやって下さい！！！！」

ダメだ、コイツに言葉は通じない。

「れ、霊夢…コイツ…変なクスリとかやってんのかな…？ちょっと怖いぜ…」

本気で心配そうな目をアリスに向ける魔理沙。上海にまで可哀想な物を見る目で見られている。もつと哀れんでやりなさい。

「どうせやるなら魔理沙もかかって来なさい！そして二人の熱いのを私にぶちこんで…っ！！」

いかん。ほつといたら規制とかに引つ掛かりそんな予感がするわ…

「ねえ！まだ？まだなの！？やるの？やらないの！？早く私に「夢想封印！！」「マスタースパーク！！」いいやあああああああ

………！！！」

断末魔と共に空の彼方に消えるアリス。これでモラルは守られた。でも…

「朝からあんな変態を見て嫌な気分だわ…」

「まったくだぜ…こんな日は縁側でごろごろするに限るんだぜ」
年寄りみたいな事を言うやつね…まあいいわ。

「それならちよつと待ってなさい。お茶とお茶菓子を用意してきてあげるわ」

「えへへ…さんきゅーれいむー」にこつと笑う魔理沙。うん…この笑顔のためならお菓子も惜しくないわね。

〈少女休憩中〉

「あ、もうこんな時間だぜ」

魔理沙に言われて、壁に掛かった時計を見る。時刻は12時。どうやらのんびりとくつろいでいる間に結構時間が経っていたらしい。

「あら…もうお昼ね…どうする？ウチで食べてくの？」

「いや…流石にお昼まで頂くのは悪いから、紅魔館に頂きに行こう

ぜ！」

この子が遠慮をするなんて…いや、遠慮はしてないのか。結局紅魔館に行つて食べるつもりらしいし。

「行くなら早く行きましよう？日が暮れちゃうわ」

「そうねえ…早く行つちやいましよう魔理沙！私達の愛の「黙れ変態！！（ばきつ）」あふん！！」

いつの間にか後ろにいたアリスに思わず裏拳を放ってしまった。ホントにどこからでも湧いてくるわねコイツは…

「ちょ、霊夢！流石にアリスが死んじゃうぜ！」

「大丈夫よ魔理沙…コイツは殺しても死なないわ」

「確かにそうだけ」

「え？私つてそんな認識？何？サンドバック？……良いっ！」
なんだコイツ気持ち悪い。

「霊夢、早く行こうぜ…アリスに構つてたら一日終わっちゃうぜ」

「それもそうね…じゃあ行きましようか」

「あー、無視するなんてひどーいー！私も…私もいっくううううん！！！」

もう半ば諦めながら魔理沙と二人でふよふよと紅魔館に向かう。積極的なDMつてのは恐ろしいわ…

第一話「変態は死んでも治らない」(後書き)

はい、お久しぶりです。えふちーです、()ノ
まず言わなければならぬことがあります…

全国のアリスファンの皆さん、ごめんなさい() ;)

だが後悔も反省もしてなry

私の中でアリスはあんな子です。そして今後出てくるあの人やヤツ
もそんな子ですw

乞うご期待！

それでは、また応援よろしくお願いしますm()——() m

第二話「そして変態は動き出す」

〈霧の湖〉

「……………（凍ったアリス）」

「……………（霊夢と魔理沙の哀れみの視線）」

「わははー！見たか、あたいのさいきよーの強さをー！（騒ぐバカ）」

「

「よくやったチルノ！金平糖をやるぜ！」

「ありがとう魔理沙ー！」

「期せずして変態が沈黙したわね」

目的地へ向かう途中で黙ってくれて良かった。

ほのぼの幻想郷

〈あかいあくま〉

「あー！！霊夢霊夢！」

「何よいきなり…ビックリするわね魔理沙」

「アリスを湖に沈めてくるのを忘れたぜ」

どこのヤクザだ。

「ちゃんと置いてきたじゃない…凍ってるし」

「置いてきただけじゃ心配だぜ…」

本気で殺す気なのかしら。友人として心配だわ。

「止めを刺しに行つてたらそれこそ日が暮れちゃうわ…お腹空いたしね」

「それもそうだな」

私のさりげないフォローで、間髪アリスの命は救われた。後でたつぷり搾り取ってやるう。お金とか。

〔紅魔館門前〕

「あ、魔理沙…と霊夢？珍しいわね」

門前にはもふもふとパンを頬張る門番の美鈴がいた。昼寝をしていないとは珍しい。

「よう美鈴！遊びに来たぜ！」

「私がいたら迷惑かしら？」

「魔理沙だけでも結構迷惑かな？あははっ」

む…コイツもなかなか…可愛いわね。要チェックだわ。

「まあお邪魔させてもらうわね？美鈴」

ちよっと色目。可愛い子にはとりあえずアピールよ。

「あ…うん、別に今日は構わないわよ」

まあダメでも入るけどね。

「ところで美鈴…アナタの持つてるそれ…」

「ああこれ？私のお昼ご飯よ」

「……………」

これはまさか…紅魔館は経済難…？来るタイミングを間違えたか！
くそっ！

「あからさまに嫌そうな顔しないでよ…心配しなくてもお嬢様達にはちゃんとランチを用意してあるみたいよ？」

「あら…なんの話かしら？」

意外とカンは鋭いみたいね。

〔紅魔館・レミリアの部屋〕

「ふふ…咲夜、今宵も月が紅いわ…」
「まだお昼ですわ、お嬢様」
「……………私が日没前に起きてんだからそこを褒めなさいよ」「吸血鬼なので、夜に起きて下さらないと。昼更かしはいけませんっ」
「いけませんっ、じゃないわよ…いちいち揚足とんな」
「これは失礼しました。それより…冷めないうちにお昼ご飯をお召し上がりになったほうがよろしいのでは？」
「ん、そうね…じゃあ」
「私があ〜ん（はあと）してあげますわ」
「……………」
「……………」
「お前吸血鬼舐めてんのか」
「え？舐めて良いんですか？では遠慮なく（スルスル）」
「ちょ、何で服脱いでんだ！！だ、誰か！誰か助けて！メイドに…メイドに犯される！！」
「バンツ！！（部屋の扉が開く音）」
「「ちょおーっと待ったああ！！！！」」
「っ！！邪魔が入ったか！」
「あ…霊夢！魔理沙！助けに」「その豪華ランチをよこせ！！」「き…て…」
「はい、どうぞ」
「おお！快くOKが出たぜ！なんで裸なんだ咲夜？」
「うまつ！これうまいわよ魔理沙！なんで裸なの咲夜？」
「昼食を摂るためですわ」
「「なるほどな」「」
「なるほどな、じゃねえっ！！助けてよれい…あつ！咲夜、ちょ、まつ…アッー！！」」

「なあ霊夢ー」
「なによ魔理沙、私まだ食べてるんだけど」
「私達はお邪魔のようだぜ」
「あらホント…これは野暮なことをしたわね」
「そうだな」
カチャカチャ…スタスタスタ…バタンツ
「え？ちよ…おおい！！昼ご飯持っなくな！てか助けてえー！！」
「うふふ…お嬢様、今夜は寝かせませんわ…ハアハア」
「あ…あ…れ、霊夢ううー…！！」

〈霧の湖〉

「「ごちそうさまだぜ、二つの意味で」
「ごちそうさまね、二つの意味で」
昼間からお盛んねえ…アイツらは。
「さて、これからどうするんだ？」
「そうねえ…お腹も膨れたし、デザートが欲しいわね…」
「なら里に行つて何か買おうぜ！」
「いいけど…アンタ奢りなさいよね」
お金なんて持つてないし。
「もちろん良いぜ！霊夢のためだからな！」
よし、これは私を食べてサインだな？
「ありがとう。じゃあ向かいますようか」

〈霧の湖〉

「.....
（冷たい.....）」

第二話「そして変態は動き出す」(後書き)

どうも、えふちーです、(ノ)

さて、いかがでしたか？

かなり変態成分が増えましたね…だんだんと危険な方向へ進んで行
ってる気がしますw

そして、今回なんとなく霊夢も変態臭を漂わせました。魔理沙逃げ
て！

次は…また変態が出てくる予定です
では次話をお楽しみに、(ノ)シ

第三話「変態を抑えたらこうなった」

〈魔法の森上空〉

「あのさ、霊夢…奢ってやるとか言っただけだよ」

「なによ？今更キャンセル？」

「いや…その…」

「何よ？」

「財布を…忘れちゃったんだぜ…」

「恥ずかしそうに俯いて言う魔理沙。うわぁ…めっちゃめっちゃ可愛いなあ…。」

「まあ…それなら取りに行ったら良いじゃないの」

「魔理沙ったら財布を忘れちゃうなんてかーわーいーいー！食べちゃいたいわぁ…あつはぁん！」

後ろから珍獣が現れた。

「うお、いつの間についていたんだアリス？」

「その前にどうやって氷融かしたのよ？」

「そんな些末なことはどうでも良いのであった」

ホントにこの女は…

ほのぼの幻想郷

〈伝説のけねもっこ〉

「じゃあ、確認するわよ…財布は？」

「持ったぜ！」

「帽子は？」

「被ったぜ！」
「アリスは？」
「置いてくぜ！」
「ひどいつ！？」
「さあ、行こうぜ霊夢」
「そうね…もうお腹ペコペコだわ」
「ちよちよちよちよ、ちよつと待って二人とも！ってああ！も
ういない！？私も連れてってよおおおん！！」

〈人間の里〉

「やっと着いたぜ！」
「早くお昼ご飯を…」
そろそろ空腹が限界だ。
「む？珍しいな、霊夢じゃないか」
「こんにちは慧音…今日は寺子屋の授業は無いの？」てか早くお昼
を…。
「ん？ああ…今日は休みなんだ「ぐううううー」二人とも、私の
家で昼飯を食べるか？」
「マジで？いいの！？」
「ちよつと待て、私は腹を鳴らしたのは霊夢だけだぜ」

「ああ、別に構わないぞ」
「うおおありがたいとう！慧音大好きよ！！」
ついでに抱き付いてやるう。ふかふかしてそうだし。
「なっ、だ、抱き付くな馬鹿者が…ちよつ、魔理沙、剥がしてくれ
！」
「……………」

おお、なんかふかふかにふにふにしてる。抱き心地が良いわ！

「お、おい魔理沙？聞いてるのか…あつ、れ、霊夢！あんまりもぞもぞするな！魔理沙あー！」

「……………私が財布を取りに行った事の意味は…」

〈慧音の家〉

慧音の家の前で作戦会議中。慧音は何やら企んでいるらしい。

「いいか？入ったら三人で言うんだぞ？」

「いいけど…なんで私達まで？」

「財布「いつまでも言ってるんじゃないの！」あい！」

まあ沈んだ魔理沙も可愛いんだけども。

「あー、何故かと言うとだな…恥ずかしがる妹紅が見たいのだからまさかこいつは…ふつ。」

「話が分かるわね慧音」

「お前もな霊夢…さて、入るぞ？」

「OKよ！」

「私も言うのか？ちょっと怖いんだが…」

「大丈夫よ魔理沙、私がアナタを守るわ」

そつと抱きしめ…

「まあ良いぜ、さつさと入ろう」

られなかった。かわされた。

「うむ。さあ行くぞ、せーの…」

ガチャッ

「…もつこたーん！！」「…」

ダダダダダ…

「けけ、けーね！あんまりそうやって大声で呼ぶなって言ったたる！？」

お、真つ赤な妹紅が走ってきたわね…こいつもなかなか可愛いわ…

「ただいま帰ったぞ妹紅」

「邪魔するんだぜ」

「いただき…お邪魔します」

いただきますはまだ早いわね。

「?…なあ慧音、なんでこいつらがいるんだ?」

若干不満気な妹紅。慧音と二人の時間を邪魔されたくなかったんだろっか。

「ああ、昼食がまだだと言っのでな。別に二人分くらい余計に作っても問題ないだろう?」

「まあ別に構わないけど…一人じゃ大変だろ?私も手伝っよ」

「いや、妹紅に働かせるわけにはいかんからな…私一人でも大丈夫さ」

「そんなわけにはいかないよ!それじゃあどっかのニートみたいになっちゃっ」

「妹紅はきちんと外に出るではないか。だから大丈夫だ」

「何が大丈夫なんだ!?はあ…だいたい慧音は…」

〈少女口論中〉

…で。

「なんで私達が用意することになってるのかしら…ぐすっ」

「知らないぜ。客人はもてなすもんだる普通…」

「ったく…だからバカップルは嫌いななのよ…ぐすっ」

「なあ霊夢、さっきから何泣いてるんだ?」

「泣いてないわよ。玉葱切ってたのよ…」

「なるほどな…」

後ろからはバカップルの楽しそうな声。ちくしょう…後で退治してやる…

ああ……玉葱が目に染みるわ……ぐすっ

第三話「変態を抑えたらこうなった」(後書き)

はい。オチてないですね…すみませんw

どうも、えふちーです、(´・`・)

いかがでしたか？今回は若干変態成分を抑えてみました…サブタイトルでも言っているとおりです

そしてえらく時間がかかってしまいました…携帯の調子が絶不調なので(汗)

買い替え時かなあ…

では、第四話をお楽しみに！

第四話「変態はいつそ清々しく」

〔博霊神社〕

「うーねむ…ふわぁ…つふう」

眠い目をこすりつつ、思わず欠伸が漏れる。外からは軽快な小鳥のさえずり。

「う、ぐおお…頭痛い…飲み過ぎたかしら…」

その小鳥のさえずりさえもイカれたビートのパンクロックに聞こえる。いわゆる二日酔い。

「ん…？」

小鳥のかき鳴らす激しいビートの中に、トントントン…と言つまな板を叩く規則的な心地良い音。どうやら台所に誰かがいるらしい。

こんな朝早くから泥棒…？

「私の家を荒らす輩はどこのだいつだぁあぁう！？」

「あ、おはようございます霊夢さん」

「なんだ早苗か…朝ご飯早く」

「はいはい…あの、霊夢さん？」台所で料理をしている早苗が私に声をかける。

「なによ…うるさい妻ね」

「つ、妻！？妻になった記憶は…まあ嬉しいんですけど…」
私から視線を逸らす早苗。

「いいから用件を言いなさい！」

「は、はい…その…」

チラチラとこちらの様子を伺いつつ、早苗は口を開いた。

「なんで…服を着てないんですか…？」

「……………ひえ？」

急に顔が熱くなり、目の前が真っ白になった。

ほのぼの幻想郷
↳博麗霊夢の崩壊

「つまり、朝っぱらから神社に侵入して朝飯を作っていたら、全裸の霊夢が後ろから現れて、急に気絶した、と」
でもなんで全裸？

「はい」

「で、お前は何をやってるんだ？」 「何って…見て分からないんですか魔理沙さん！介抱ですよ！」

「気絶した霊夢を襲おうとしているようにしか見えないんだが…」

「何をおっしゃいますか！これは立派な介抱です！」

「ちょ…待て、変な所を触ろうとするな！」

「これは診察です！心音に異常が無いか確かめてるんです！あつ、体温も計らないと…ここなら計りやすそうですね！うふふふ…」

「何を言っているんだお前は!？」

「コイツはヤバいな…変なクスリでもやってるんじゃないかな。本気で心配になるぜ。」

「う…んう…」

「あつ、霊夢が目を覚ますぜ？そんなことやってると殺されるぞ」
にしても無駄に色っぽい声だなあ霊夢…

「構いません！むしろ好都合です！無理矢理犯すという」「ふんにゅつ！」 ああつ！！

早苗を蹴り飛ばして霊夢から剥がす。

「今ふんにゅつとか言っちゃったぜ…恥ずかしっ」

早苗は動かない。やりすぎたか…まあそれよりも今は霊夢だ。

「おい霊夢、大丈夫か？」

「あ…魔理沙さん…私…」

良かった、一応意識は戻ったようだ。…ん？

「あれ…？」

待て、何かおかしい。

「どうしたの？魔理沙さん…」

ん…？今なんて…？

「魔理沙…さん…？」

「え…私、何かおかしい事言いました…？」

そう言つと、霊夢は上体を起こす。

「い、いや…別におかしくは…」霊夢から視線を逸らす。なんと
うか…この霊夢はヤバい。

「そうですか？良かった」

私を見上げてニコツと微笑む霊夢。ああ、私はもうダメかも知れ
ない。

「な、なあ霊夢？」

「はい、なんですか？」

くっ…その上目遣いは止めてくれ…！！

「あのさ、なんか体調悪い、とか無いか？」

「体調、ですか？」

「あ、ああ…例えば、頭の調子が悪いとか…」

「私の頭がおかしいみたいな言い方しないで下さい！」
ぷくつと頬を膨らませて怒る霊夢。すげえ可愛いぜ…

「わ、悪い…あはは…」

さて、今これを言うべきではないかもしれんが…

「霊夢」

「はい？」

私は勇気を振り絞つて、霊夢にこう告げた。

「胸…丸出しだぜ…？」

「……きゃあああああー！！！！」

くその頃早苗く

「(ムクツ)…………後半へ続く!」

第四話「変態はいつぞ清々しく」（後書き）

なんかどうもすみませんでした

みなさんボンジュール！えふちーです、（ノ

また時間が開いてしまいました。でも反省はry

はい、今回はほのぼの幻想郷初の前後編のお話の前編なわけですが…

早苗ファンの方すみません（二回目）

そして霊夢が大変なry

まあとにかく、後半へ続く！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2077k/>

ほのぼの(?)幻想郷～変態達の宴～

2010年10月10日15時03分発行